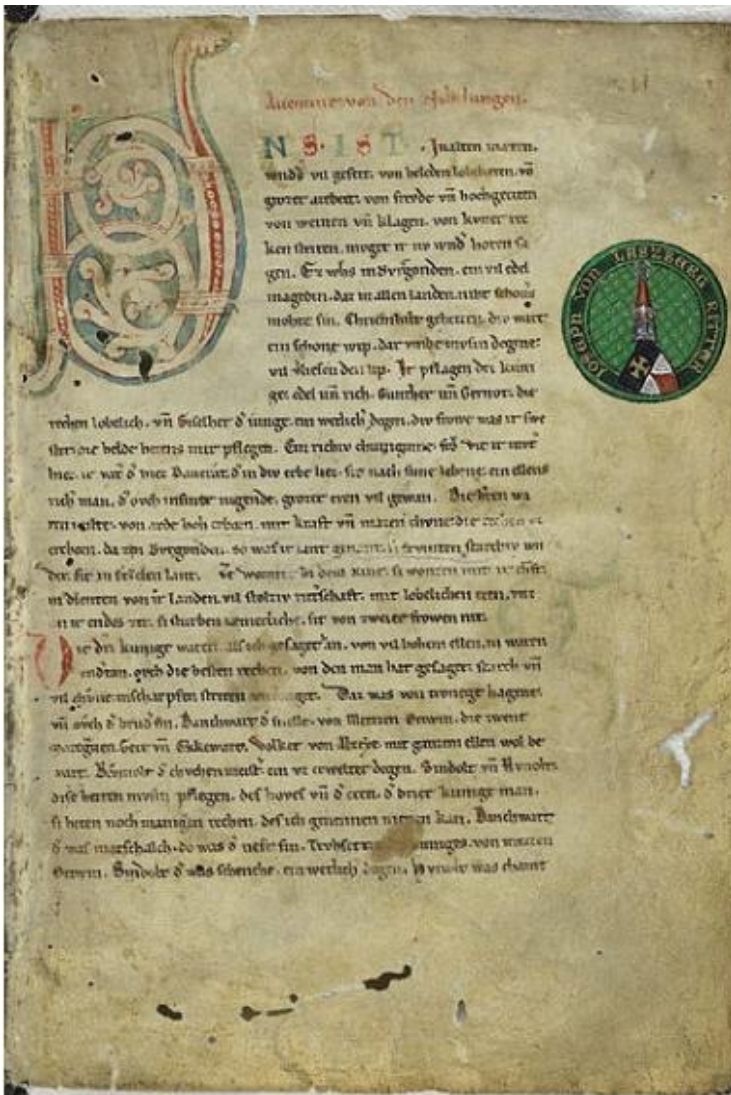


ゲルマン民族の英雄伝説

ー 生氣横溢なニーベルンゲ族を統べるものー

岡崎 忠弘

アイスランドに残る『エッダ』や『サガ』が伝える北欧神話や伝説、イギリスの『ベオウルフ』、ドイツの『クードルーン』など、広い意味で、ゲルマン民族の英雄伝説とみなすことのできる文学作品はいろいろとある。それらの一つ『ニーベルンゲンの歌』は、キリスト教の影響が表面に留まるのみで、ゲルマン民族の古からの民族性を浮き彫りにしている英雄叙事詩である。今日の話はこれに絞る。



ジーフリトとクリエムヒルト (Wikipedia; Nibelungenliedより引用)

著者近影

「ニーベルンゲンの歌」の写本Cの1ページ目
(Wikipedia; Nibelungenliedより引用)

1. 『ニーベルンゲンの歌』の紹介

< 『ニーベルンゲンの歌』の成立等の概要 >

この英雄叙事詩は、1050~1350年頃ドイツ高地で使われていた中高ドイツ語 (Mittelhochdeutsch = middlehighgerman) で書かれている。この叙事詩の内容に触れている宮廷叙事詩『パルチヴァール』(1200-1210年の成立)から推して、その成立時期は、1200-1203年ごろかと思われる。

当時のドイツには、ドイツというまとまった国家意識はなかった。時代を大きく捉えれば「神聖ローマ帝国」時代、小さく捉えれば「ホーエン・シュタウヘン王朝」時代に当り、キリスト教の聖職者勢力とともに、勃興してきた騎士階級が勢力を振るっていた時代である。大司教領のパッサウ辺りの出身の、教会と関わりの深い詩才豊かな詩人の手に成る英雄叙事詩と思われるが、作者は不詳である。

4世紀後半から5世紀のゲルマン民族の大移動時代のさまざまな戦闘や事件を素材として、英雄伝説や民話が形成された。時代が下るにつれてそれらが束ねられアッチラ(Attila)王(ca.406-453)のフン族に滅ぼされたブルグント国(Burgunde)の伝説、怪力の女傑プリュンヒルト (Prünhilt) 伝説、更に竜退治のジーフリト(Sivrit)伝説となり、これら史実もとりまぜた本来別々の伝説が、最終的には、一人の詩人の手によって、一大叙事詩へ纏め上げられたのが『ニーベルンゲンの歌』である。

なお、写本は断片まで入れて34種類の多くを数え、広く愛読されたことが分る。原本は失われているが、写本は、A本(2316詩節)、B本(2379詩節)、C本(2439詩節)の3系統に分れ、最後の一文の最後の一語：daz ist der Nibelunge nôt (liet).によって、AとBは nôt (苦境・苦悩・必然)本、Cはliet (歌)本と呼ばれている。(講演では、物語の舞台の広さとあらすじを述べたが、本稿では省略する)。

< 『ニーベルンゲンの歌』の特性 >

この英雄叙事詩の内容は、ごくごく簡単に言えば、「復讐物語」。夫を殺された女性が自分の血族に対してその仇を討つ話だが、その復讐の方向が特徴的。ドイツ語に Blutrache なる語がある。「殺された者の血縁者が、殺した者あるいはその血縁者に対してなす復讐」のことである。この叙事詩では、ブルグント国王グンテル(Gunther)の妹クリエムヒルト (Kriemhilt) が夫ジーフリト(Sivrit)を殺した血族のハゲネ(Hagene)と実兄のグンテルに対して、本来血縁者ではない夫の復讐をなすので、厳密に言えば、Blutrache の概念から外れている。夫への愛、夫に寄せる triuwe (= Treue まこと、真心) が、血縁を絆とする部族社会への帰属意識よりも、上位に置かれている物語となっている。

この点を押さえた上で、ここでこの英雄叙事詩の特性について粗描しておく：



ジーフリトとクリエムヒルト (Wikipedia; Nibelungenliedより引用)

作者のリアリズム

“この三日間心痛の激しさのあまり一切飲食をしなかった人々も相当いた。しかしながら彼らとてすっかり身体を見捨てるわけにもゆかず、今日でもなおそうするように、哀悼の意を尽くしたのちは身を養った”(詩節1072)。この表現には虚飾がない。「ジーフリトの死にすべての人々が激しい心痛に襲われ、いつまでも一切の飲食を断ち、哀悼の意を尽くしてやまなかった」。こう書き改めれば、文飾をそれと感ぜないほど鈍感になってしまったわれわれの耳にはあたりはいいが、リアリティは失われる。

ホーマーの『オデュッセイア』：ユリシーズらが、蛸のような怪物の住む海峡を通過の際、船員六人を取って食われつつも、大急ぎで漕ぎ抜け、次の島の岸へ船を繋ぎ、「清水の近くで夕餉をして、飲み食いの欲を追い出せしとき、愛しき伴侶たちのことを思い出し、泣き始めたが、やがて、さめざめむせぶ彼らに、甘美なる眠りが押し寄せぬ」(田中・松浦訳 伊藤整『改訂文学入門』光文社 1969年より再引用)と相通じるものがある。

生身の人間の行動なら、さこそあらめ、という風に、『ニーベルンゲンの歌』の登場人物たちは動く。ここに汲めども尽きぬ魅力がある。私はまずこの叙事詩のこういう人間くささに惹かれた。

自然な生命力を全開にした生き方

『ニーベルンゲンの歌』の人間たちは感情をストレートに表現する。悲しければ泣き、楽しければ喜び、怒りを感じれば、直ちに行動に移す。感情表出に歪みがない。彼らの思考過程にも変なねじれは認められない。たとえば、求愛の対象となる女性は、何はおいてもまず美人でなければならない。「顔はまあまあだが、その心根はやさしく気高く」の「が」に込められた心情の屈折が彼らにはうとましい。求愛する男性の第一の要件は富貴(riche)であること。嘘偽りのないところではないだろうか。

物質に対する欲望を彼らは決して隠さない。オブラートに包まず、率直に表明する。宴の席に招かれた遍歴の楽人たちは引き出物の多寡によって宴の主人の度量を測り、一方、富貴な身分の者たちの惜しみなく贈与する度量の広さがこの期待に応える。公の席に出るとなると、男も女も華美のかぎりを尽くした衣装で身をかざる。彼らはほどほどということを知らない。クリエムヒルトの所有欲は徳操高き婦人と呼ぶのがはばかれるほどに凄まじいものがある。彼らにとっては、外観は本体なのである。

感情・欲望の素直な表出、思考の単純さ、これらが歪んだり、ひねくれたり、ねじれたりしていかないだけに、彼らの行動にはいささかの迷いもなく、おのずと徹底性が生じてくる。クリエムヒルトのブルグント勢に対する復讐に、また、ニーベルンゲンの財宝の在りかを死を賭けて黙秘するハゲネの姿に、彼らの行動の徹底性の好例をみる。

彼らは、どんな窮境に追い込まれても、決して自刃はしない。

ドイツ文学史における『ニーベルンゲンの歌』の位置づけ：

この作品は研究者から次のように評されている。

- ・全巻を貫き流れる「愛即哀」の思想（服部正巳訳：『ニーベルンゲンの歌』東洋出版 1977年）。
 - ・力あるものはことごとくみな、神々ですら滅びざるをえないという暗い宿命観の響きとおるなかで、あでやかな美女が、花やかな試合が、絢爛たる婚礼や饗宴が、勇壮な戦闘や凄絶な殺戮がつぎつぎにくりひろげられ、しかも夫へのまことと武士の意地とから、がっきと組み合ったままともに滅んでいくクリームヒルトとハーゲンにおいて、強烈な意志の徹底性が描きつくされているところの、二千四百歌節のすこぶる劇的な叙事詩は、ゲルマン精神の壮大無比な記念碑である。（佐藤晃一：『ドイツの文学』明治書院 1967年）。
 - ・悲劇的な運命意識に裏打ちされたゲルマン民族の英雄主義・異教徒的巨人主義が織り成す世界。ゲルマン人の忠誠・誠実の徳、力の讃美、意志の徹底性（しばしば見かける一般的概念）。
- ただし、このような大仰な概念で先入観を形作ってはいけない。巨視的に見ればこうも言えようが、仔細に登場人物の行動を追っていくと、よく言えば、彼らは本来の生命力を全開にして生きているし、平たく言えば、極めて人間臭い。「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり」で始まる冒頭の哀調に躓いて、多くの者が『平家物語』に思想を読み取ろうとするが、実際は、平家の人々はよく笑い、よく泣いて、自然な生命を躍動させて生きている。彼らの生氣横溢な一途さを、我が身のこととして感じるこそ肝要で、すぐさま高等な解釈に走る読み方は慎まねばならぬ。

ただ、ここで急いで付言しておきたい。「悲劇的な運命意識に裏打ちされたゲルマン民族」とは言っても、偽りの招待を受けてエツツェルの城へ向かうブルグント勢一万六十名のうち、かの地における全滅の運命を自覚しているのは、ハゲネただ一人だけである。しかもこの勇士は、従順に運命に頭を垂れるのではなく、挑むかのように運命に逆らい、必死になって闘って生き延びようとする。従容として死に就くハゲネの姿などどこにも見当たらない。

2. 問題提起：生氣横溢なニーベルンゲ族を統べるものは何か？

いかなる苦境に陥っても、彼らは決して天を仰がない。キリスト教はこの英雄叙事詩の皮相に留まっており、神の慈悲にすぎるとか、博愛の行動をとるとか、こんなことは彼らには思いも寄らぬことである。ゲーテの言葉を借りれば、「彼らはいさかいをひき起こすために寺院に詣でる」のである。さして重要性をもたない日常の生活では、彼らは節度と作法をまもり、キリスト教徒らしく礼拝し、婦人奉仕を重んずる騎士として振る舞うが、彼らの命運がかかわる大事の際には古来のゲルマンの武士として意志決定をなし、行動をとる。キリスト教や騎士道精神は彼らの行動にミックスされてはいるが、本質的なものではない。

キリスト教にも影響されず、騎士道にもさほど規制されず、彼らは自由奔放に、欲望のおもむくままに、天真爛漫に行動するが、彼らの行動を統べるものはなかったのか。あるとすれば、それは果して何なのか。今日はこれを探してみたい。

3. 問題の切り口： 幻滅のセリフ

問題の切り口としての幻滅のセリフというのは：

「そなたが、わたしから奪い取ったものを返してくれるなら、そなたは、まだ生きて、故国ブルグントへ帰ることもできるのだよ」(詩節2367)。

„welt ir mir geben widere, daz ir mir habt genomen, 2367-3
sô muget ir noch wol lebende heim zen Burgonden komen.”

「私から奪い取ったもの」とはニーベルンゲンの宝のことで、ここに至ってまだ宝が欲しいのかと、貞節一途のクリエムヒルトのこのセリフに、若き私はかつてこの上はない幻滅を感じた。

「夫ジーフリトを殺されて寡婦であること十三年、フン族の王と再婚してこの日を待つこと更に十三年、苦節二十六年の怨念をこめて、ここに亡夫ジーフリトの無念を晴らす」と啖呵を切るや、復讐の鬼女と化したクリエムヒルトは、謀殺者ハゲネにぱっさりと剣を振り下ろす、と期待していたのに。

鷗外の『舞姫』の最後の一文：「嗚呼、相沢謙吉が如き良友は世にまた得がたかるべし。されど我脳裡に一点の彼を憎むところ今日まで残れりけり」。友達のせいにするなんて、卑怯だよ、太田豊太郎！信じて頼るエリスを裏切って生ける屍にした責任は、すべて、お前にある！友人相沢謙吉を憎むなんて、卑怯だよ！若くて性急な私は、そのあとしばらくは、鷗外を読む気になれなかった。同じ興醒めをクリエムヒルトのことばに感じた次第。

このセリフの出る場面を詳しく見て、新たな解釈を試みてみたい：（なお、訳は全て岡崎訳）

王妃はハゲネのいるところへ行った。 二三六七
勇士ハゲネに向かって妃は、なんと憎々しげにことばをかけたことか！
「そなたが、わたしから奪い取ったものを返してくれるなら、
そなたは、まだ生きて、故国ブルグントへ帰ることもできるのだよ」

二三六八

すると、気性の荒々しいハゲネが言った、「そのような話は、いと高貴なお妃様、まったく詮ないことよ。わがご主君方のお一人でもご存命のかぎりには、あの宝は人には見せぬと、わしは、しかと、お誓い申し上げたのだ。よって、生きていらっしゃるかぎり、わしは、宝はだれにも渡しはせぬ」

「その件、私が決着をつけてあげます！」、高貴な王妃は言った。 二三六九
そこで、妃は、兄の命をとるよう命じた。兄の首は打ち落とされた。
妃は、頭髪をつかんで、この首級をトロネゲの勇士の前へ持ってきた。
ハゲネの悲痛はここに極まった。

主君の首級を見ると、沈痛の思いの武人ハゲネは、 二三七〇
クリエムヒルトに言い返した。

「これで、そなたは、そなたの思い通りに決着をつけた。
まさしく、わしが考えていたとおりの結末となったわい。

いまや、ブルグント国の貴き王は亡くなられた。 二三七一
若きギーゼルヘル様も、ゲールノート様もお果てなされた。
財宝のありかを知る者は、いまは、神とこのわしのほかは、一人としておらぬ。
鬼女よ、宝は、そなたにとって、永久に、隠されたままであろう」

二三七二
妃は言った、「それでは、そなたは私にまったく償いをしなかったことになる。
ならば、せめて、そのジーフリト様の剣を手元に置いておこう。
その剣は、私の愛しい夫が、見納めとなったあの時に、帯びておられたもの。
あの方にまつわる私の深い悲しみは、そなたのせいで生じたのだ」
〔注：剣は、捕らわれの身のハゲネが、このときまで腰に帯びている〕

妃は剣を鞘から抜きとった。ハゲネにはそれを妨げる手立てはなかった。 二三七三
この時の妃の思いは、武人ハゲネの命を奪い取ることにあった。
妃は、両の手で剣を振り上げ、武人の首を刎ねた。
エツェル王はこれを目にした。王の心痛は一通りではなかった。



ハゲネにグンテルの首級を示すクリエムヒルト（Wikipedia：Nibelungenliedより引用）

クリエムヒルトとハゲネは、ニーベルンゲンの宝をめぐる、何を争っているのでしょうか。

宝の在りかを白状すれば、生きて故国に帰してやる、これでは復讐の放棄ではないか！悲嘆に明け暮れること十三年、人々のそしりもあらばあれと、異教徒のエッツェル王と再婚して機が熟するのを待つこと更に十三年、ハゲネの命を奪う、この一事のためにのみ生きてきたクリエムヒルトが、悲願達成の直前に、自らこれを放棄して、宝を取り戻したい！正気の沙汰ではない！

クリエムヒルトのこの言葉、とても本気で言っているとは思えない。復讐の可能性が未知数のうちなら、ニーベルンゲンの財宝を手段にして、復讐の手勢を募ることもあろうが、今はもう剣を振り下ろせば、復讐は成るのだ。

あのことばには、きっと、裏の含みがあるに違いない！私はこう解釈する：今のクリエムヒルトにとって、財宝は夫の形見、夫の分身、象徴的なものへと昇華されており、ブルグント勢がエッツェルの居城に到着して以来、彼女は財宝にことづけて、夫を返せ、と応えようもない無理難題をいくども仇敵ハゲネに突きつけている。

何故か？ クリエムヒルトにしてみれば、夫を奪われただけでなく、夫謀殺の幫助までさせられて妻としての誇りも挫かれた。だから、ただ単に、ハゲネの命を奪っただけでは十全でなく、彼の武人としての名誉も潰した上で殺したい。

いま仮に、「さようでございますか、誓い合った三人の御主君方も今は亡くなり、誓いを守る要もなくなりましたので、申し上げますが、ヴォルムスからライン河を下ったローヒェの激流の河底に財宝は隠してあります」などとハゲネが白状したら、クリエムヒルトはどう反応したであ

ろうか。「誓約を破るは武人の恥！武人の誉れまで捨てるのか！」と一喝したあと、やはりハゲネの首を刎ねたであろう。ハゲネも王妃の狙いを百も承知しているから、頑としてはねつけて、武人の名誉を守り切る。ニーベルングンの財宝をめぐる二人の争いは、ハゲネの武人としての名誉をめぐる争いであり、ハゲネが名誉だけは渡さず、死を受け入れる。〔拙論『Welche Bedeutung hat der Nibelungenschatz? ニーベルングンの財宝の意味するもの』1987年〕
なお、武人ハゲネの首を刎ねたクリエムヒルトも、その直後、老雄ヒルデブラントに体を切り裂かれて果てる。彼女の死をもって、この壮大な叙事詩は、生き残った人々の悲嘆の声の中、おわりとなる：

二三七四

「これは、無残！」、エツツェル王は言った、「かつて戦の庭に立った者のうちで、あるいは、かつて盾を手にした者のうちで、最も優秀な武人が、いまや、女の手にかかって、討ち果たされてしまったとは！わしがあの武人といかに敵対していたとはいえ、これでは、わしも心の痛みは尽きぬ」

二三七五

この時、老雄ヒルデブラントが言った、「ハゲネを討つなどという思い切ったことをしでかした妃を、このまま放っておくわけにはいかぬ。
たとえそのためこの身がどうなろうと、なるほど、ハゲネはこのわしを命の危機にまで追い込んだ男ではあるが、それでも、あの勇猛なトロネゲ人の仇は、このわしがとってやる！」

二三七六

ヒルデブラントは、怒りに燃えて、クリエムヒルトにさっと駆け寄ると、王妃に猛烈な太刀の一撃をくわえた。
クリエムヒルトは、ヒルデブラントに対する恐怖から、わなわなとふるえた。妃は甲高い悲鳴を上げたが、そんなことが何の役に立ったであろうか。

二三七七

ここに、死すべき運命の者は、すべて、死んだ。
高貴な王妃も、首と胴体の二つに、切り裂かれた。
ディエトリーヒとエツツェルは泣いた。
二人は血縁者や家臣たちのことを心底から嘆いた。

二三七八

さしもの輝かしい栄光も、ここに、滅んでしまった。
悲嘆と苦悶で胸のふさがらぬ者は、一人として、いなかった。
喜びは最後には苦しみをもたらす、これが世の習い、
エツツェル王の宴も、苦しみをもち、終わりとなった。

二三七九

その後どうなったか、皆さまにお伝えできませんが、
ただ、騎士や婦人たちが、身分賤しからぬ従者たちともども、
いとしい身寄りの者たちの死に涙している姿が、見られるのみでございました。
この物語はここに終わりを告げます。これがニーベルンゲ族滅亡の話であります。

4. 『ニーベルンゲンの歌』の人々が死守するもの

上記ハゲネの例に見るように、『ニーベルンゲンの歌』の人々が死守するものは、名誉である。そして彼らにとって名誉とは何であったか？

ドイツ語êre (= Ehre) は「誉れ・体面・面子・顔・自尊心」と訳せよう。現代のドイツ語で、Ehrverlust の語は「公民権喪失」の意味だが、外観は本体であるとする『ニーベルンゲンの歌』の人々にとっては、「名誉」の意義は深長で、存在価値・理由 *raison d'être* そのものである。êre [名誉ある状態] → leit [苦しみ：名誉の潰された状態] → rache [名誉回復の復讐] →そして再びêreへ。この循環が繰り返される、と唱える研究者もある。

従って、これが潰されると、一大事となる。以下、幾つか例証を挙げる [講演では、手許の資料として、拙訳を数節にわたって引き、具体的な説明の助けとしたが、本稿では省く]。例証1：クリエムヒルトに求婚する目的をもって、本国ニーデルラントを離れたジーフリトは、ヴォルムスに着くや、突如、ブルグント国のグンテル王に、領国・領民を賭けての一騎打ちを申し込む。ひたすら懐柔策に出るブルグント勢の居並ぶ前で、ジーフリトは、「剣を！」と叫ぶオルトウィーンをなじり、あるいは、ことば尻を捉えては重臣ハゲネを罵倒する。公衆の面前で名誉を潰された二人は、やがて起る王妃たちの争いを契機に、これを雪辱の好機とらえ、ジーフリト謀殺の仕掛人となる。〔拙論『ジーフリトの挑発について』（1986年）の論旨：「作者はジーフリトの面罵を雪辱の伏線として設けている」について、急ぎ言及した〕。例証2：ブルグント国の王妃ブリュンヒルトは、大聖堂の前でクリエムヒルトから、側女と罵られ、動かぬ証拠として指輪と腰帯を見せつけられて、王妃としての名誉と女としての自尊心を完膚なきまでに潰される。泣き崩れる王妃に重臣ハゲネが進んで雪辱を誓う。例証3：vater aller tugende 「あらゆる武徳の父」と仰がれた辺境伯リュエデゲールも、臣従と親族の情とのジレンマに追い込まれるなか、武人としての名誉を求めて苦悩する。この叙事詩では、名誉の毀損と雪辱の事例が、その他多数、見出される。

5. ニーベルンゲ族を復讐戦へ巻き込んでいくもの

それにしても、グンテルら三兄弟王をはじめとして、招待に応じたブルグントの武士たちは、何故クリエムヒルトの復讐の戦いに巻き込まれていったのであろうか。

三兄弟王は既にクリエムヒルトとは和解しており、彼女とエツツェル王の善意を素直に信じて、招待に応じている。武装した千名の武士と九千の従者を引き連れてきたのは、重臣ハゲネが強く進言したためである。

それにクリエムヒルトが討ちたいのは、ハゲネ一人だけだ。クリエムヒルトの持ちかけた報奨に目がくらんだブレーデル（エツツェル王の弟）に殺された九千の従者たち、この丸腰の従者たちの弔い合戦として、ブルグント勢は、フン族と戦闘に入るが、戦闘から身を引くチャンスはあった。夏至の長い一日を戦い終わって、日暮れとなり、姉クリエムヒルトとことばを交わすつかの間の機会が訪れる。以下のことばの応酬のなかに、血族の絆の強さを読み取ることができよう：

二一〇四

「あなた方が私に、ハゲネ一人を、人質として引き渡す気があるなら、それなら、あなた方を生かしておくことを、わたくし、拒みはしませんよ。何と言ったって、あなた方は私の兄弟だし、同じ母の子どもなのですから。そうすれば、私、ここにいるこれらのフン族の勇士たちと和議の相談もしますわ」

二一〇五

「まっぴらご免だ！」、ゲールノートが応じた。

「たとえわしらうちの千人がそなたと血のつながる一族であったとしても、ここでその一人でも人質としてそなたに引き渡すくらいなら、わしら血族は、一人残らず、死んだ方がましだ。そんなことは絶対にせぬ！」

千人に対して一人が対比されている。たとえ千人の多くを数えても、一人も渡さぬ！それほど血族の絆は固いのだ！と、要求をきっぱりとはねつける。「血族の意識」が戦闘から身を引くことを、彼らに許さない。このあと、クリエムヒルトは兄弟達の立てこもる広間に火を放たせる。

クリエムヒルトが「血族」(Sippe)を信じてハゲネに夫の秘密を漏らす場面にも、「血族への意識」が、叙事詩の底流として、脈々として流れている：

八九八

王妃は言った、「そなたは私の血族であり、同じく私はそなたの血族である。だから、そなたを信頼して私は、愛しいお方をそなたにお任せします。愛しい夫をしっかりと守ってくだされ！」 止せばよかったものを、王妃はハゲネに、自分の知っている秘密を、しゃべってしまった。

その他、クリエムヒルトに対してニーデルラントへの帰国を促すジーフリートの父ジゲムントの言葉(詩節1074)、ブルグント残留を説得するギーゼルヘルらの言葉(1081-1082)、クリエムヒルトが兄弟たちの招待を夫エツェルに持ちかける言葉(1403)〔講演では該当の詩節を手元の資料として提示した〕、これらの言葉の中では「血族への意識」がその主張に論拠を与えている。この意識が、彼らの行動に、いわば外側から、枠を嵌めている。(尤も、クリエムヒルトの復讐行為はこれに逆行して、この外枠を一気に壊している。『ニーベルンゲンの歌』は、底流に逆流を注ぎ込む二重の構造をとっている。このねじれ現象については、稿を改めて考察しなければならない)。

なお、『ニーベルンゲンの歌』における封建主従の縛りは契約関係であり、命を捨てて主君へ忠節を尽くす、「忠臣蔵」に代表されるわが国の儒教的武士道を、そのままこの叙事詩に当て嵌めて主従関係をはかつてはならない。ジレンマに陥った辺境伯リュエデゲールはエツェル王に主従関係の解消を願い出る(2157)。また、クリエムヒルトにニーベルンゲンの財宝の在りかを白状するよう強えられるハゲネは、三兄弟王との財宝秘匿の誓いを優先して、主君グンテルを見殺しにする(引用の詩節2367-2373を参照)。更にまた、今は敵となったリュエデゲールから所望の盾を手渡されたハゲネは、「わしはこの戦闘で決してそなたには手は触れぬ、たとえそなたがこれらブルグント勢を皆殺しにされようとも」(2201)と、一方的に誓いを立てる。この時点では彼の主君の三兄弟王はまだ生きて苦戦を戦い抜いていた。

6. 結び

自然な生命力を全開にして、奔放なまでに、喜怒哀楽の激しさに身を任す彼らの行動を統べるものが二つある。彼らが死を賭けても守る「名誉心」、彼らを底流として規制する「血族の意識」、これがそれである。

(本稿は2012年7月17日にTSS文化大学で行った講演の概要である。)

主要参考文献

岡崎忠弘：『ジークフリートの挑発をめぐって』 広島大学総合科学部紀要『言語文化研究』12
1986

岡崎忠弘：『Welche Bedeutung hat der Nibelungenschatz?』 日本独文学会中国四国支部
『ドイツ文学論集』20 1987

翻訳の原本：

- ・ Sankt Galler Nibelungenhandschrift (Cod. Sang. 857) Herausgeber: Stiftsbibliothek St. Gallen Basler Parzival-Projekt Basel 2003. CD
- ・ Das Nibelungenlied Nach der St.Galler Handschrift herausgegeben und erläutert von Hermann Reichert Walter de Gruyter Berlin 2005.
- ・ Das Nibelungenlied Nach der Ausgabe von Karl Bartsch Herausgegeben von Helmut de Boor Zweiundzwanzigste revidierte und von Roswitha Wisniewski ergänzte Auflage F. A. Brockhaus Mannheim 1988.